

2.10 蒲原沢の土石流（位置 No.㉓）	
発生年月日	平成 8 年（1996）12 月 6 日
発生地点	蒲原沢 （長野県小谷村/新潟県糸魚川市境）
緯度・経度	36.8519, 137.8581
発生誘因	融雪
天然ダムの形成	有 ・ 無
被害状況	人的被害：死者 14 人、家屋被害：なし
災害概要	<p>前年の平成 7 年（1995）に発生した土砂災害の復旧工事中、平成 7 年とほぼ同一地点の崩壊地が拡大し、姫川本川に達する土石流が発生しました。崩壊規模は長さ 120m、幅 60m、最大深さ 20m に及び崩壊土砂量は約 39,000 m³（内土石流となって流下した土砂量約 31,000 m³）でした。この時、災害復旧工事中の作業従事者 14 人の尊い命が犠牲となりました。</p>



位置図

国土地理院「標準地図」に加筆

◎ 蒲原沢の土石流とその影響

平成 8 年（1996）12 月 6 日の蒲原沢の土石流による災害発生当時、蒲原沢では、平成 7 年（1995）7 月の集中豪雨による土砂崩壊等を受け、建設省（現国土交通省）、林野庁、長野県の発注による災害復旧工事が行われていました。

この土石流の発生源となった崩壊は、蒲原沢上流部の谷壁斜面で発生した崩壊（写真 2.51）で、姫川との合流点から上流約 2.7 km、標高 1,300 m 付近で発生した土石流は、少なくとも 5 波にわたり蒲原沢を流下し、姫川まで到達しました。

この土石流が災害復旧工事現場を直撃し、工事に従事していた 68 人のうち、14 人の人命が失われ、9 人の負傷者が出た大災害となりました（清水・三戸・澤井・館野，2017）。

本災害を踏まえ、松本砂防事務所では、この災害を決して風化させることなく、教訓として、砂防工事現場の安全対策を活かすことを目的に、災害発生から 2 年後の平成 10 年（1998）から、毎年工事安全対策研究発表会を開催しています。この発表会は、平成 11 年（1999）から、順次、全国の直轄砂防事務所へ展開されており、平成 26 年度（2014）からは、国土交通省土砂災害防止月間の行事の一つとして「全国砂防工事関係工事安全施工管理技術研究発表会」が毎年 6 月に開催されています。加えて、災害発生から 20 年の節目となる平成 28 年度（2016）には、本発表会の他に砂防工事に関する安全対策会議も開催されました。

また、本災害を契機に「労働安全衛生規則」、「土木工事安全施工技術指針」、「土木工事共通仕様書（案）」等の文書が改正されました。それらに加えて、現場の実態に応じて、規則に規定された事項とそれ以外にも事業者が配慮すべき事項、取り組むべき事項等について、具体的に明らかにした「土石流による労働災害防止のためのガイドライン」が新たに策定されました。

このように、この災害は、砂防工事施工に伴う安全対策に対して大きな影響を与えた災害でした。



写真 2.51 標高 1,300m 崩壊地の全景
（社団法人地盤工学会蒲原沢土石流調査団，1997）



写真 2.53 常法寺の安魂地藏尊塔と十四地藏尊，
2019 年撮影

◎ 慰霊碑

蒲原沢の土石流による災害発生から約 1 年後の平成 9 年（1997）11 月 21 日、蒲原沢左岸（新潟県側）、国道 148 号新国界橋の姫川側橋詰に慰霊碑（写真 2.52）が建立され、慰霊祭が行われました。慰霊碑は現在も糸魚川市が管理を行っています。また、小谷村の常法寺には、この災害の犠牲者を悼み、安魂地藏尊塔と十四地藏尊（写真 2.53）、常願観音（写真 2.54）が建立されています。



写真 2.52 新国界橋近くの慰霊碑，2019 年撮影



写真 2.54 常法寺の常願観音，
2019 年撮影



図 2.46 蒲原沢の土石流の災害状況図（地理院地図に加筆）

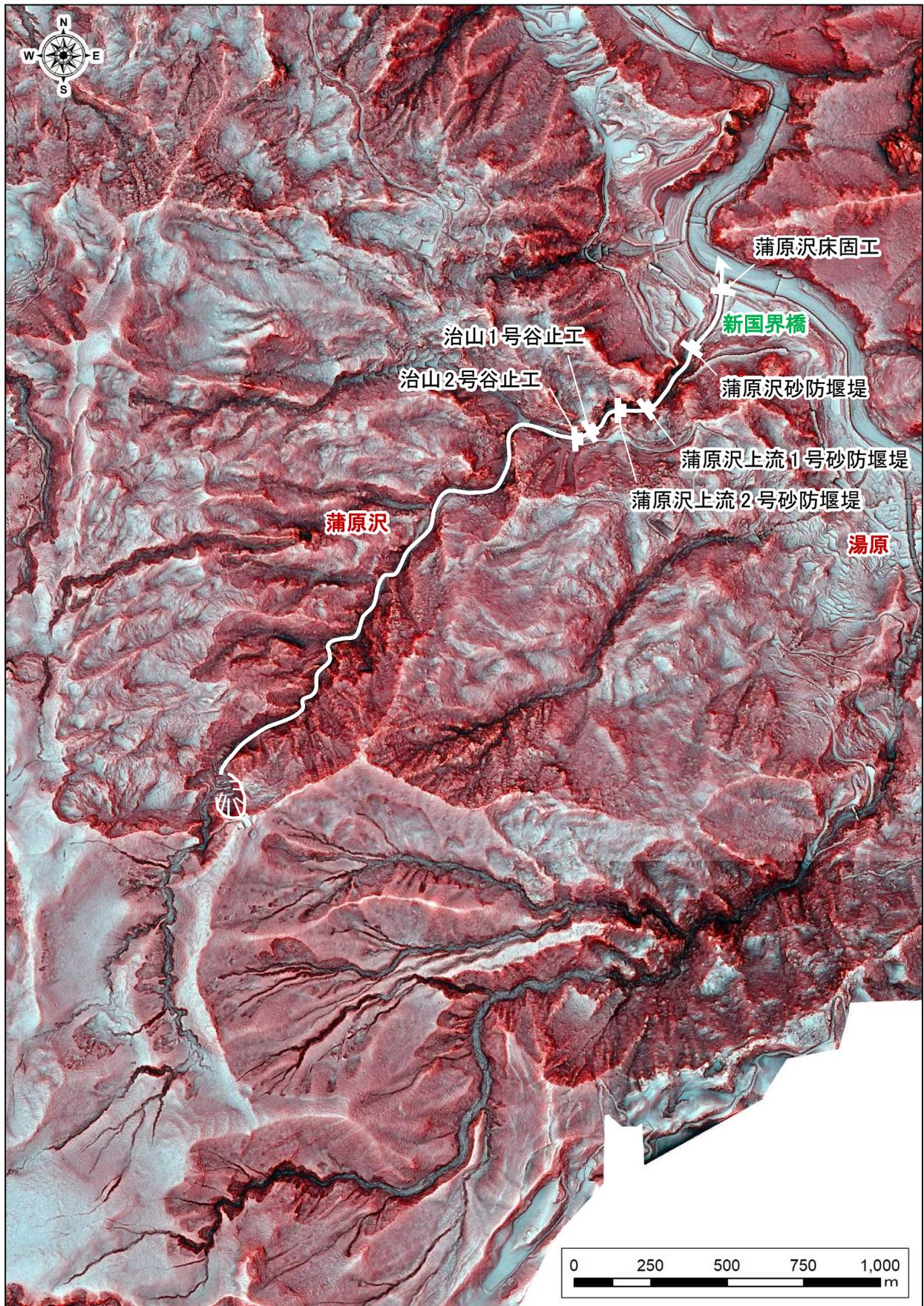


図 2.47 蒲原沢の土石流の災害状況図の赤色立体地図